第九章　應用第四

哲学上ニ於ル種々ノ概念ノ解釈ニ就テ

前章マデニ関係自性ハ相待的ニ関係シテ存立スル所ノ両項即チ一切万有ノ実在デ有ルヿ及ビ其関係自性カ保有スル所ノ両項存立ヲ為メ（充足原理トシテ）ニ具有スル所ノ四種充足的理法及ヒ其理法ノ効力トシテ表現スル所ノ四種契機ヲ論シテ之ヲ形而上学、宗教哲学及ヒ倫理哲学ニ應用シテ所謂実在的問題即チ理論的問題ノ解答ヲモ所謂生活的問題即チ実行的問題ノ解答ヲモ完結

シタカラ之ヲ一段落トシテ本講述ヲ完結シテ
モ宜シイノデ有ルガ東西古今ノ哲学界ニハ種
々ノ概念ノ解釈ニ就テ様々ノ異論モ有ルカラ
其中ノ重モナル。概念ニ就テ関係自性ノ理法及
ヒ契撥ノ上カラ正當ナル釈義ヲ下シテ置クノ
ハ讀者ラシテ本講述ノ了解ヲ容易ナラシムル
ノ便宜モ有ルト考ヘルカラ左様ニスル
空間及ヒ時間　空間ハ共存ノ関係デ有ル時間
ハ継續ノ関係デ有ル世人ハ往々空間カ先在シ
テ而シテ共存ノ関係カ起リ時間カ先在シテ而

シテ継續ノ関係カ起ルヿカ出来ル空間カ無レ
ハ彼此共存スルヿハ出来又時間カ無レハ前後
継續スルヿハ出来又ト考ヘテ居ルガ其レハ全
ク間違デ有テ共存ノ関係カ即チ空間デ有テ継
續ノ関係ガ即チ時間デ有ルノデ有ル前各章デ
言フタ如ク関係自性ハ相待的ニ関係シテ存立
スル所ノ両項ヲ保有シテ居ル此両項保有ト云
フヿガ直チニ共存ヲ意味シテ空間デ有ル又四
種充足的理法ノ効力ニ因テ或ハ一項ヲ肯定シ
テ他項ヲ否定シタリ或ハ一項ヲ否定シテ他項

ヲ肯定シタリシテ兩項カ互ニ推移スル此兩項
推移ト云フヿカ也チニ継續ヲ意味シテ時間テ
有ル吾人カ數千万里ノ空間有リテ共存シ數千
百年ノ時間カ有リテ継續スルト考ヘテ居ルノ
モ実ハ兩項ノ保有ト推移トヲ誤解妄想シテ居
ルノデ有ル。兩項ノ保有即チ共存モ無ク。兩項ノ推移即チ継續
モ無イ所ノ空間又ハ時間ト云フ者カ有ルト考
ヘルノハ恰カモ物ノ形カ無イ處ニモ影カ潜在
シテ居ルト想像スルノト同シ。誤解妄想事デ有ルサテ此
空間ニ於ル彼此時間ニ於ル前後ノ兩項モ四種

充足的理法ノ効力トシテ互ニ保持包含セラレ
互ニ融合一致セラルヽカラ一點ノ中ニ十方虚
空ヲ容レ一瞬間ノ中ニ數千万年ヲ容レ又ハ一
點カ十方虚空中ニ遍在シ一瞬間カ數千万年ノ
間ニ遍在シ一點カ十方虚空テ有ルト同時ニ十
方虚空カ一點テ有リ一瞬間カ數千万年テ有ル
ト同時ニ數千万年カ一瞬間テ有ルト云フ道理
ニナル

備考　併教中ノ華嚴宗流ニ於テ廣狹自在無
碍門十世隔法異成門ナドヽ言フノハ則是

デ有ル

性質及ビ分量　性質ハ同異ノ関係即チ一ノ性質ト他ノ性質ト同異ノ関係デ有ル分量ハ多寡ノ関係即チ一ノ分量ト他ノ分量ト多寡ノ関係デ有ル

第一ニ性質即チ同異ノ関係ニ就テ言ヘハ一ノ性質カ一ノ性質トシテ存立スルハ他ノ性質ノ力ニ依リ（第一理法）自己ノ力ニ依リ（第二理法）他ノ性質ト相違シ（第三理法）又他ノ性質ト相依シ。（第四理法）

デ始テ一ノ性質トシテ存立スルヿカ出来ル一

例リ言ヘハ一ノ正四形ガ正四形トシテ存立スルハ。（此正四形ニ異ル所ノ）他ノ正方形其他種々ノ形ノ力ニ依リテ正四形トシテ區別セラレ（第一理法）自己カ正四形タルノ力ニ依リテ正方形其他種々ノ形ト區別セラレ（第二理法）正四形ハ全ク正四形トシテ正方形其他種々ノ形ト相違スル所ノ所ハ相違ノ力ニ因リ（第三理法）正方形其他種々ノ形ト。（正四形ト）相依シテ對比對映セラルヽノ力ニ因テ正四形トシテ存立スルカラシテ正四形ハ常ニ自己中ニ正方形其他種々ノ形ヲ保持包含シ之ヲシテ自己ト融合一

（他ノ正方形其他種々ノ形ニ異ル所ノ）

致セレムルト俱ニ正四形ニ非ル所ノ正方形其
他種々ノ形モ亦常ニ自己中ニ正四形ヲ保持包
含シ自己ト融合一致セシメテ居ルノデ有ル
第二ニ分量即チ多寡ノ関係ニ就テ言ヘハ一ノ
一トシテ存立スルハ之ヲ倍シテ二トナリ之ニ
二ヲ加ヘテ三トナリ之ヲ四倍シテ四トナリ乃
至之ヲ數倍加上シテ五六七八九十百千万億等
トナル為メノ一デ有リテ孤存獨立ノ一デハ無
イ孤存獨立デハ一ト云フ分量ハ決シテ起ラヌ
二ノ二トシテ存立スルモ之ヲ折半シテ一トナ

リ之ニ一ヲ加ヘテ三トナリ之ヲ倍シテ四トナ
リ乃至之ヲ數倍加上シテ五六七八九十百千万
億等トナル為メノ二デ有リテ孤存獨立ノ二デ
ハ無イ孤存獨立デハ二ト云フ分量ハ決シテ起
ラヌ特リ一ト二トガ左ウデ有ルバカリデ無ク
三四五六七八九十乃至百千万億等モ皆同シク
孤立獨存デ有テ他ノ一切數ト相待的ニ関係セ
ヌハ其分量ノ分量タルヲ成サヌノデ有ルカラ
一切數中ノ一ハ常ニ自己中ニ他ノ一切數ヲ保
持包含シ自己ト融合一致セシムルト俱ニ此一

モ亦常ニ他ノ一切數ノ中ニ普遍的ニ保持包含セラレ普遍的ニ他ノ一切數ト融合一致セラルヽノデ有ル

備考　佛教中ノ華嚴宗ニ於テ因陀羅網境界門ト云フノハ是デ有テ天上ノ帝釈宮殿ヲ莊嚴スル所ノ珠網中ノ各珠カ一切珠ト對映シ一切珠モ亦各珠ト對映スルニ譬ヘタ者デ有ル又同宗中ニ「十錢ヲ數フル法」ト云フノモヤハリ同シ事デ有ル

デ有ルカラシテ關係自性ハ無限無量ノ相待的ニ關係シテ存立スル所ノ兩項ヲ保有シテ居ルノデ有ル何故ナレハ關係自性カ具有スル所ノ理法トシテ一有レハ必ス一切數有リ一切數有テ而シテ始テ此一ガ一トシテ存立スルヿガ出來ルカラテ有ル

実在及ヒ現象　關係自性ハ兩項即チ一切万有ノ実在デ有テ兩項即チ一切万有ハ關係自性ノ現象デ有ルト云フヿハ第四章デ言フタ如クデ有ル併シナガラ是ハ一應ノ論デ有テ今若シ論理ノ基礎ヲ一階止揚シテ実在ト現象トノ關係

トシテ之ヲ見レハ実在ト現象トモ亦相待的ニ
関係シテ存立スル所ノ両項トシテ関係自性ノ
為メニ保有セラレテ居ルノデ有テ此両項ノ実
在ハヤハリ。一皆止揚セラレタル所ノ関係自性デ有ル幾回論理ノ基礎ヲ
止揚シテ見テモ全ク同シ事デ有テ関係自性ハ
常ニ両項ノ実在デ有テ両項ハ常ニ関係自性ノ
現象デ有ル是ハ此関係哲学ニ説明シタ所ノ理
法及ヒ契撥カ関係哲学其レ自身全部ヲ規定ス
ルノデ有ルカラ讀者ガ注意シテ充分ニ了解シ
テ置クヿヲ望ムノデ有ル

原因及ヒ結果　佛教デハ直接原因ヲ因ト名ツ
ケ間接原因ヲ縁ト名ツケテ區別シテ居ル欧洲
哲学家ノ多クハ直接原因ノミヲ原因ト名ツケ
間接原因ヲハ理由若シクハ状態ナドヽ名ツケ
テ區別シテ居ルノカ多イ併シナカラ余ノ考デ
ハ直接間接ノ相違ハ有ル。ガ原因ハ原因ニ違イ
ハ無イカラシテヤハリ原因ノ中ニ數ヘテ區別
スルノ必要カ有タ時ニハ直接原因ト間接原因
トニ區別スルカ宜シイト考ヘル
ソコデ此関係哲学ニ於テ研究シタ所カラ言ヘ

八第三章ニ於テ言フ所ノ如ク宇宙上ニ於ル一切
中ノ一ガ一トシテ存立スル
ノ他ノ一切中ノ各一ガ原因
テ此一トシテ存立セシム心
モ亦其一ニ非ル所ノ他ノ一切中ノ各一ガ原因
ト為リテ此一ヲシ
ト為リテ其一ヲシテ存立セシムル
ト倡ニ此一若シクハ其一ガ原因トシテ此一若
シクハ其一ニ非ル所ノ他ノ一切ヲ存立セシム
ルニ非レハ此一若シクハ其
一切中ノ各一ハ存立スル
コトガ出来又

結果ノ中ニ把持包含セラレ結果ト融合一致セ
ラレタル第二理法ノ効力トシテハ原因中ニ把持包含シテ原因ト融
三理法ノ効力トシテハ原因ハ常ニ結果ト相違
シ結果ハ常ニ原因ト相違シテ居ル。ケレドモ第
四理法ノ効力トシテハ原因ハ常ニ結果ト相依
テ原因トシテ存立シ結果ハ常ニ原因ト相依テ
結果トシテ存立シテ居ル。
総別又ハ全分ト徳ト別トガ相待的ニ関係シテ
存立スル所ノ両項デ有テ別無キノ総モ無シハ

ハ第三章ニ於テ言フタ如ク宇宙上ニ於ル一切
中ノ一ガ一トシテ存立スルニハ此一ニ非ル所
ノ他ノ一切中ノ各一カ原因ト為リ此一ノ
一切中ノ各一ハ存立スルニ此一ニ非ル所
ノ他ノ一切中ノ各一カ原因ト為リ此一ノ
一ニ非ル所ノ他ノ一切中ノ各一カ原因ト
為リ其一ニ非ル所ノ他ノ一切中ノ各一カ原因
ト為リ其一ニ非ル所ノ他ノ一切中ノ各一カ原因
ト為リ有ルカ為ニ言ハバ一切中ノ各一ハ互ニ原因
ト為リ互ニ結果ト為リテ相待的ニ関係シテ存
立シテ居ルノデ有ル原因ヲ自トシテ結果ヲ他
トシテ言ヘハ第一理法ノ効力トシテハ原因ハ

結果ノ中ニ把持包含セラレ結果ト融合一致セ
ラレ。（印度哲学ニ所謂無因無果論）第二理法ノ効力トシテハ原因ヲ原
因中ニ把持包含シテ原因ト融合一致セシメ。（有因無果論）第
三理法ノ効力トシテハ原因ハ常ニ結果ト相違
シ結果ハ常ニ原因ト相違シテ居ル。（因果異体論）ケレドモ第
四理法ノ効力トシテハ原因ハ常ニ結果ト相依
テ原因トシテ存立シ結果ハ常ニ原因ト相依テ
結果トシテ存立シテ居ル。（因果同体論）ノデ有ル
總別又ハ全分 總ト別トガ相待的ニ関係シテ
存立スル所ノ両項デ有テ別無キノ總モ無シハ

總無キノ別モ無イト云フヿハ分リ切タヿデ有ルガ其レシ故ラニ茲ニ持チ出シタノハ夫ノプラドートアリストートルカラ由来シテ中世期ノ哲学界ニ於テ大牟論ト為リタ所ノ名目論者ハ人トカ馬トカ總括シタ所ノ概念ハ名ノミデ有テ存立シテ居ルノハプラトートカアリストートルトカ「生月」トカ「摺墨」トカ言フ個人個物ノミテ有ルト主張シ実体論者ハ人トカ馬トカ總括シタ概念ハ真ニ存立シテ居ルノデ有ルト主張シタノデ有ル畢竟宇宙上ニ於ル一切万有ハ

△ト実体論ノ事ニ就テ一言スル為メデ有ル名目論

皆相待的ニ関係シテ存立スル所ノ両項デ有テ甲ノ一項ハ実ニ存立シテ他ノ乙ノ一項ハ存立セヌト云フ様ナヿハ理法上ニ於テ有リ能ハヌト云フヿヲ了解セヌ所カラ起リタ牟論デ有ル即チ前ニ言フタ如ク人トカ馬トカ云フ總括的概念即チ總カ無ケレハプラトートカアリストートルトカ「生月」トカ「摺墨」トカ云フ個人個物即チ別モ無イ又別カ無レハ總モ無イ名目論者ハ總ノ無イ所ノ別カ有ルト主張シ実体論者ハ別ノ無イ所ノ總カ有ルト主張シタ譯ニナルノデ

東京棒原製

有ルカラ何レモ背理的タルヿヲ免レヌ

備考　佛教中ノ華嚴流ニ於ル六相円融法ノ中ノ總別ノ關係ハ則是テ有ル

目的論及ヒ撥制論　此宇宙ハ一ノ目的ガ有テ之ニ向テ進行スルト主張スル所ノ目的論ト此宇宙ハ別ニ目的ガ有ルデハ無ク只物理的法則ニ從テ運動又ルノデ有ルト主張スル所ノ撥制論トノ爭論ハ唯心論者若シクハ宗教家ト唯物論者若シクハ物理学者トノ間ニ今以テ已マヌガ是ハ畢竟因果觀ト究竟觀トノ衝突デ有ルカ

Kausalitaet　Finalitaet

ラ宇宙ノ因果性ト究竟性トハ畢竟同物異觀デ有ルヿヲ了解スレハ此爭論ハ渙然氷釈スルデ有ラウト考ヘル

本章原因及ヒ結果ノ條下ニ言ヲタ如ク一切万有ノ一ノ者ヲシテ一ノ者トシテ存立セシムルハ此一ニ非ル所ノ他ノ一切中ノ各一ガ其原因デ有テ他ノ一切中ノ各一ヲシテ各一トシテ存立セシムルノモ亦同シヿデ有ル是ハ則一切万有ヲ因果性カラ觀察シタノデ有テ即チ撥制論デ有ル今若シ眼ヲ一轉シテ一切万有中ノ一ノ

者ヲシテ一ノ者トシテ存立セシムルハ此一ニ
非ル所ノ他ノ一切中ノ各一ガ存立スル。所ノ目的
デ有テ他ノ一切中ノ各一ヲシテ各一トシテ存
立セシムルノモ亦同ジ事デ有ルト考ヘレバ則
一切万有ヲ究竟性カラ観察シタノデ有テ即チ
目的論デ有ル故ニ一切万有中ノ各一ハ因果観
カラ見レバ互ニ原因トナリ互ニ結果トナリテ
存立スルト同シク究竟観カラ見レハ互ニ目的
トナリ互ニ手段トナリテ存立スルノデ有ル此
ノ如ク観察シ来レバ畢竟目的論ト撥制論トハ

△カントガ此背反ノ由テ起ル所ヲ主観ノ上ニ帰シタルノ非ハヘーゲルガ其論理学ノ始ニ論尽シテ居ル之ニ高テ余カ解決スル所ハ

同物異観デ有ルカラシテ其牟論ノ根拠ハ此説
明ニ因テ渙然氷釈セ子ハナラヌノデ有ルト考
ヘル

Die Antinomie der reinen Vernunft

純理ノ背反　カントガ其純理批判中ニ。列挙シ
タル分量性質関係及ビ様式ニ関スル所ノ純理
ノ背反四種八様ノ論ハ相待的ニ関係シテ存立
スル所ノ両項即チ定立ト反定立トヲ第四理法
即チ相違的存立理法ノ効力ニ因テ双方カラ之
ヲ論シタノニ過キヌノデ有ル△即チ第一種ノ論
ハ本章中時間及ビ空間及ビ分量ノ條下ニ第二

。合理世界学ノ不可能ヲ論スル為ナニ

国立国会図書館　渡辺国武関係文書(その2) 2137

Die Antinomie der reinen Vernunft

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）2137
挟み込み物

者ヲシテ一ノ者トシテ存立セシムルハ此一ニ
非ル所ノ他ノ一切中ノ各一ガ存立スル。所ノ目的
デ有テ他ノ一切中ノ各一ヲシテ各一トシテ存
立セシムルノモ亦同シコトデ有ルト考ヘレバ則
一切万有ヲ究竟性カラ観察シタノデ有テ即チ
目的論デ有ル故ニ一切万有中ノ各一ハ因果観
カラ見レバ互ニ原因トナリ互ニ結果トナリテ
存立スルト同シク究竟観カラ見レハ互ニ目的
トナリ互ニ手段トナリテ存立スルノデ有ル此
ノ如ク観察シ来レバ畢竟目的論ト撥制論トハ

△カントガ此背反ノ由テ起ル所ヲ主観ノ上ニ帰シタルノ非ハヘーゲルガ其論理学ノ始ニ論尽ヽシテ居ル之ニ高テ余カ解決スル所ハ

同物異観デ有ルカラシテ其牟論ノ根拠ハ此説
明ニ因テ渙然氷釈セ子ハナラヌノデ有ルト考
ヘル

Die Antinomie der reinen Vernunft

純理ノ背反　カントガ其純理批判中ニ。列挙シ
タル分量性質関係及ビ様式ニ関スル所ノ純理
ノ背反四種八様ノ論ハ相待的ニ関係シテ存立
スル所ノ両項即チ定立ト反定立トヲ第四理法
即チ相違的存立理法ノ効力ニ因テ双方カラ之
ヲ論シタノニ過キヌノデ有ル△即チ第一種ノ論
ハ本章中時間及ビ空間及ビ分量ノ條下ニ第二

。合理世界学ノ不可能ヲ證スル為ナニ

種ノ論ハ性質及ヒ總別ノ條下ニ第三種ノ論ハ
目的論及ヒ掇制論ノ條下ニ第四種ノ論ハ原因
及ヒ結果ノ條下ニ之ヲ説明シテ有ルカラシテ
今別ニ之ヲ喋々スルノ必要ガ無イト考ヘル

備考　本章ニ於テ性質、分量、原因結果等ニ
就テ一言シタニ就テ有名ナルカントノ十
二範疇ノ下ニ就テ一言スルカントノ十二
範疇ハ実ニ人類知識ノ總目録ト言フテ宜
シイ併シナカラ特リ第三ナル関係門ニ於
ル本質ト属性、原因ト結果バカリデハ無イ

第一ナル分量門ニ於ル単一ト複数、統計（ト
分数）第二ナル性質門ニ於ル現実ト拒否、有
限（ト無限）第四ナル様式門ニ於ル應有ト不
應有、存在ト不存在、必須ト未必トノ如キモ
亦関係自性カ保有スル所ノ各両項タルニ
過ヌト云フヿニ気カ附カナンダノミナラ
ズ第三ナル関係門ノ中ノ第三ナル離接断
定ト適應スル所ノ相関ト言フノガ以上ニ
列挙シタ各両項ヲ規定スル所ノ根本的原
理デ有ルト云フヿヲ見落シテ之ヲカヽ

ハ類別四門中ノ第三ナル關係門ノ中ノ第三ニ列シ又其關係門ノ中ノ原因ト結果トノ關係ヲ論シテ「後項ハ前項ヲ取リ極メル者デ無イカラシテ先項ハ後項ト倶ニ一ノ全体ヲ合成セヌ恰モ造物者ガ宇宙ト倶ニ一全体ヲ合成セヌ如クデ有ル」ト言フタノハ「原因結果」相關ノ理ヲ忘レタノミナラス其例證トシテ挙タ所ハ能造ト所造トノ相關互摂ヲ誤解シテ所造ヲ離レタ所ノ能造カ有ルト見タノデ有ルガ所造ヲ離レテハ能造ト云フ事実モ名称モ存立スルコトガ出来スノデ有ルカントハ其純理批判ノ中ニ往々此ノ如キ種々誤謬ノ見解ガ有ルニモ拘ラス兎ニ角此十二範疇ハ前ニモ言フタ如ク実ニ人類知識ノ總目録デ有ル只其列次系統カ甚ダ錯雑シテ居ル若シ第三ナル關係門ノ中ノ第三ナル相關ノ一範疇ヲ基礎ニ置キテ他ノ十一範疇ヲ規定スル所ノ根本的原理ト為シテ。之ヲ研究シタナラバ當時已ニ此關係哲学ト殆ンド同一ノ一哲学系統

ガ完成シテ居タカモ知ラヌト考ヘル惜イ

コデ有タ

第十章　結論

前各章ニ於ル研究ノ結果トシテ断定セシ所ノ八大事項及ヒ四種観察法ノ大要ニ就テ

前各章ニ於テ講述シタ所ヲ一括シテ簡單ニ茲ニ一言スレハ本講述大別四部ノ中緒論第一即チ第一章ニ於テハ此関係哲学ト他ノ哲学系統ト其研究ノ基礎ヲ異ニシ又其研究ノ方法ヲ異ニスル所ノ區別ヲ明ニシ從前諸家ノ哲学系統ニ於テ其研究ノ基礎ヲ相待的ニ関係シテ存立

スル所ノ両項中ノ何レカ一方ノ上ニ置キタル
ノ非ヲ論駁シ此関係哲学ハ之ニ反シテ其研究
ノ基礎ヲ両項中ノ何レカ一方ノ上ニ置カスシ
テ直チニ関係自性ヲ以テ研究ノ對象ト為シ研
究ノ基礎ヲ関係自性ノ上ニ置クヿヲ説明シ緒
論第二即チ第二章ニ於テハ認識論ト実在論ト
ハ相待的ニ関係シテ存立スル所ノ両項ニシテ
何レモ孤存独立スル能ハザル者ナルガ故ニ何
レヲ先ニシ何レヲ後ニスルモ只是実際研究上
ノ便宜ニ一任シテ可ナル所以ト主観若シクハ

客観ニ重キヲ置キタル所ノ各種ノ認識論ハ概
シテ偏僻ニ陥リ概シテ失敗ニ終リタル大要ヲ
講述シテ認識論モ亦其基礎ヲ関係自性ノ上ニ
置カ子ハ一歩モ進ムヿカ出来ヌヿヲ説明シテ
緒論ヲ終リ推論第一即チ第三章ニ於テハ宇宙
上ニ於ル一切万有ハ皆相待的ニ関係シテ存立
スル所ノ両項中ノ一項トシテノミ存立スルノ
理ヲ説明シ推論第二即チ第四章ニ於テハ相待
的ニ関係シテ存立スル所ノ両項即チ宇宙上ニ
於ル一切万有ノ実在ハ関係自性デ有テ関係自

性ノ現象ハ則両項即チ一切万有ヂ有ル
明シタル推論第三即チ第五章ニ於テハ両項存立
ノ完足原理トニテリ
ノ。四種充足的理法ヲ説明シ推論第四即チ第六
章ノ一半ニ於テハ四種充足的理法ノ効力トシ
テ関係自性カ表現スル心所ノ根本的基礎ヲ定
テ推論ノ部ヲ終リ応用第一即チ第六章ノ一半
ハ之ヲ人類ノ智的要求ヲ充タス可キ所ノ形而
上学ニ応用シテ其基ヲ定メ応用第二即チ第七章ニ於テハ之ヲ人類ノ情
的要求ヲ充タス可キ所ノ宗教哲学ニ応用シテ
其基ヲ定メ応用第三即チ第八章ニ於テハ之ヲ人類ノ意的要求ヲ充タス
可キ所ノ倫理哲学ニ応用シテ其基ヲ定メ応用第四即チ第九章ニ於テハ
本的基礎ヲ定メ応用第四即チ第九章ニ於テハ
本系統ノ理法及ヒ契拠ニ因テ空間、時間、性質、分
量、実在現象、原因結果、總別又ハ全分、機制論及ヒ
目的論等ノ本義ヲ解釈シタル即チ本系統ニ於ル
推論又応用ハ左ノ八大事項ヲ断定シタルノデ有
心

第一　宇宙上ニ於ル一切万有ハ皆相待的

ニ関係シテ存立スル所ノ両項中ノ一項ト
シテノミ存立スル
第二　相待的ニ関係シテ存立スル所ノ両
項即チ一切万有ノ実在ハ則関係自性デ有
テ関係自性ノ現象ハ相待的ニ関係シテ存
立スル所ノ両項即チ一切万有デ有ル
第三　関係自性ハ自己中ニ相待的ニ関係
シテ存立スル所ノ両項ヲ保有スル為メニ
両項存立ノ理法トシテ依他的存立理法依
自的存立理法、相違的存立理法及ヒ相依的

○充足原

存立理法ノ四種充足的存立理法ヲ具有シ
テ居ル
第四　関係自性ハ其具有スル所ノ四種充
足的理法ノ効力トシテ肯自否他的契撥否
自肯他的契撥、自他倶肯的契撥及ヒ自他倶
否的契撥ノ四種契撥ヲ表現スル
第五　人類ノ智的要求ヲ充タス可キ所ノ
形而上学ニ於ル其可成的要素ニシテ其最
根本的立脚地タル唯心論、唯物論、二元論及
ヒ不可思議的一元論ハ心ト物トノ関係ニ

東京榛原製

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）2137

於ル關係自性ノ四種契機ノ表現デ有ル

第六　人類ノ情的要求ヲ充タス可キ所ノ宗教哲学ニ於ル其可成的要素ニシテ其最根本的立脚地タル無宇宙論、無神論、有神論及ヒ汎神論ハ絶待ト相待即チ神ト宇宙トノ關係自性ニ於ル關係自性ノ四種契機ノ表現デ有ル

第七　人類ノ意的要求ヲ充タス可キ所ノ倫理哲学ニ於ル其可成的要素ニシテ其最根本的立脚地タル愛自説、愛他説、自他兼愛説及ヒ他律説ハ自他又ハ人我ノ關係ニ於ル關係自性ノ四種契機ノ表現デ有ル

第八　以上ノ推論的及ヒ應用的結果トシテ断定シ得タ所ノ結論ハ「關係ノ外ニ物無シ一切ハ關係ナリ」語ヲ換ヘテ言ヘハ「一切万有ノ実在ハ相待的ニ關係シテ存立スル所ノ兩項ニ非スシテ關係自性ナリ」故ニ關係自性カ具有スル所ノ理法及ヒ其表現スル所ノ契機ヲ明ニスルハ則実在的問題、即チ理論的問題及ヒ実行的問題即チ生活

東京 棒原製

国立国会図書館　渡辺国武関係文書(その2) 2137

織シタ哲学系統ノミガ真ノ普遍的系統デ有テ
他ノ哲学系統ハ皆自己哲学系統中ノ一契機タ

ルニ過キサル乎ノ如クニ宣言シタ又シヨペン
ハウエルハ其「パレルガウントパラリポメナ」ヲ
稿シ終テ之ヲ地ニ擲テ「余ハ天カ我ニ附與セシ
所ノ天職ヲ完成セリ」ト言フタト言フフデ有ル
余ハ是等ノ事ヲ聞テ是等哲学者ガヨシヤ非常
抜群ノ天才カ有タニモセヨ其餘リニ自負自信
ノ甚シキニ驚イタガ哲学者デモ何デモ無キ所
ノ余デサヘモ今此關係哲学ノ個要ヲ講述シ終
テ其系統ガ整然秩然トシテ首尾一貫前後ノ聯
絡ガ寸毫モ混淆錯乱シタ所ガ無イノヲ見テハ

的問題ヲ断定シ形而上学、宗教哲学乃ヒ倫理哲学ノ根本的基礎ヲ定メテ吾人々類ヲシテ最大至高ノ地位ニ導ク所ノ唯一無二ノ道デ有ル

以上ノ八項中ニハ余ガ本講述全体ノ精神骨髄ヲ一括シテ。居ルノミナラズ東西古今ノ各哲学系統的原理、各宗教宗派的原理及ヒ各倫理学派的原理等ヲモ皆関係自性中ノ一理法又ハ一契機トシテ完全ニ組織セラレテ居ルノデ有ル

○遺ス所ガ無イ

備考　其レニ就キテモ前。各章デモ言フタ如ク関係自性ハ有デモ無ク無デモ無ク一デモ無ク異デモ無ク只。関係自性トシテ有ヲモ表シ無ヲモ表シ一ヲモ表シ異ヲモ表スル者デ有テ自性ト言フ一語サヘモ誤解ヲ防ク為メニ已ムヲ得ス加ヘタ所ノ一ノ贅語デ有ルヿヲ考ヘ子バナラヌ

○其具有スル所ノ理法及ヒ表現スル所ノ契機

余ハ是等ノ事ヲ聞テ是等哲学者ガヨシヤ非常抜群ノ天才カ有タニモセヨ其餘リニ自負自信ノ甚シキニ驚イタガ哲学者デモ何デモ無キ所ハ余デサヘモ今此関係哲学ノ綱要ヲ講述シ終テ其系統ガ整然秩然トシテ首尾一貫前後ノ聯絡ガ寸毫モ混淆錯乱シタ所ガ無イノヲ見テハ

昔カントハ其著ス所ノ純理批判ガ哲学界ニ及ボス所ノ革命的影響ヲユッペルニクスノ地動説ガ天文学上ニ及ボセシ所ノ革命的影響ニ比較シタヘーゲルハ其論理学ノ初ニ於テ自己カ組織シタ哲学系統ノミガ真ノ普遍的系統デ有テ他ノ哲学系統ハ皆自己哲学系統中ノ一契撥タ

ルニ過キサル乎ノ如クニ宣言シタ又シヨペンハウエルハ其「パレルガウントパラリポメナ」ヲ稿シ終テ之ヲ地ニ擲テ「余ハ天カ我ニ附與セシ所ノ天職ヲ完成セリ」ト言フタト言フコデ有ル余ハ是等ノ事ヲ聞テ是等哲学者ガヨシヤ非常抜群ノ天才カ有タニモセヨ其餘リニ自負自信ノ甚シキニ驚イタガ哲学者デモ何デモ無キ所ヘ余デサヘモ今此関係哲学ノ個要ヲ講述シ終テ其系統ガ整然秩然トシテ首尾一貫前後ノ聯絡ガ寸毫モ混淆錯乱シタ所ガ無イノヲ見テハ

腹臆無ク言ヘハ・カントヘーゲルシヨペンハウ
ヱルノ三氏ト殆ムト同様ノ自負自信ノ念ガ恍
惚トシテ起ラヌデモ無イ考ヘテ見レハ人類ハ
実ニ不可思議ナ存在物デ有ル
餘計ナ話ハサテ置キ余ハ終リニ臨ムテ平生考
ヘテ居タ所ノ東西古今ノ哲学界ニ四種ノ観察
法カ分タレテ居ルヿヲ一言シテ此講述ヲ完結
スル其レハ

第一　一面的観察法 onesided contemplation

第二　反射的観察法 reflective contemplation

第三　循環的観察法 circular contemplation

第四　集中的観察法 concentrative contemplation

第一ナル一面的観察法ハ一切万有ノ原因ヲ一
面ヨリシテノミ観察スルノデ有ル甲ノ原因ハ
乙テ有ル乙ノ原因ハ丙デ有ル丙ノ原因ハ丁テ
有ルト云フ様ニ段々ニ研究シテ行テ終ニ第一
原因ニ達シヤウトスルカ如キ観察法テ有ル是
ハ四種観察中ノ最モ幼稚ナ観察法テ有ル
第二ナル反射的観察法ハ甲ノ原因ハ乙デ有ル
ガ乙ヲシテ原因タラシムルノハ其結果タル甲

デ有ルカラシテ原因ガ無レハ結果カ無イト倶
ニ結果ガ無レハ原因モ無イ故ニ原因ナル乙ト
結果ナル甲トハ互相的ニ相待的ニ関係シテ居
ルノデ有ルト云フ様ニ双方ヲ反射シ反省シテ
公平ニ観察スルカ如キ観察法デ有ル是ハ一面
的観察法ヨリモ一層進歩シテ居ル所ノ観察法
デ有ル

第三ナル循環的観察法ハ第二観察法デハ甲乙
二者双方ヲノミ反射的反省的ニ観察スルニ止
マリテ居タガ其レヲ一層擴張シテ甲ノ原因ハ

乙丙丁デ有ル乙ノ原因ハ甲丙丁デ有ル丙ノ原
因ハ甲乙丁デ有ル丁ノ原因ハ甲乙丙デ有ルト
云フ様ニ循環的ニ原因結果ノ関係ヲ観察スル
カ如キ観察法デ有ル是ハ反射的観察法ヨリモ

東京榛原製

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）2137

公平ニ観察スルカ如キ観察法ニ於テ有ル是ハ一面的観察法ヨリモ一層進歩シテ居ル所ノ観察法デ有ル

第三ナル循環的観察法ハ第二観察法デハ甲乙二者双方ノミ又射的又者的ニ観察スルニ止マリテ居タガ其レヲ一層擴張シテ甲ノ原因ハ乙丙丁デ有ル乙ノ原因ハ甲丙丁デ有ル丙ノ原因ハ甲乙丁デ有ル丁ノ原因ハ甲乙丙デ有ルトカ如キ観察法デ有ル是ハ又一層進歩シタ所ノ観察法デ有ル

第四即チ最後ナル集中的観察法ハ一面的又射的乃ち循環的観察ノ結果トシテ其レ等ノ観察法ガ依テ立ル所ノ中心的原動力中心的実在ヲ観察シテ三種観察法ノ土臺ヲ定メル所ノ観察法ヲ言フノデ有ル而シテ此第四ナル集中的観察法ガ成就スレハ理法ノ効力ニ因テ契機ガ表現スル所ハ中心点モ亦常ニ四邊ニシテ邊モ亦常ニ中心点ニテ有ル中邊一致中心点モ無クシテ而シテ到ル處中心点モ無ク邊モ無クシテ到ル處邊ナクサル無シテ有ルカラ第一第二第三ノ三観察法ハ皆此第四観察法中ニ円満具備シテ居ルノデ有ル

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）2137

七
此四種記事法ニ就テ一々例ノ挙テ言ヘハ餘リ
話ガ長クナルカラ唯其大要ノミヲ一言シテ置
クトイフノハ此四種記事法ヲ善ク翫味シテ見
ルト此関係掛学ノ個要ヲ了解スルガ為メニモ大
ニ便利ニ参考ニナルコトガ有ルデアラウト考ヘルカラ
ノ事デ有ル

備考　物理学ニ於ル物体ト物体トノ関係、
化学ニ於ル元素ト元素トノ関係、電気学ニ
於ル陽電ト陰電トノ関係、磁気学ニ於ル両
極ノ関係法律学ニ於ル権利ト義務トノ関
係政治学ニ於ル政府ト人民ノ関係若シ
ハ一国ト他国トノ関係等ニ就テ之ヲ一貫
シテ其特象ノ性質ヲ明ニシ其基ツク所ノ
理法ヲ研究スルハ甚ダ必要ニシテ且興
味有ル問題テ有ルガ余ハ其時間ヲ特メヌ
カラ天下有識ノ士ニ向テ科学原理統一論
トモ言フ可キ所ノ一書ヲ講述スルコトノ希
望シツヽ有ルノデ有ル

跋

本書ノ著者子爵渡邊國武君ハ弘化三年（西洋紀元一千八百四十六年）信濃國諏訪郡東堀村ニ生ル元治元年（一千八百六十四年）始テ東京ニ來リ各種ノ学校ニ就キテ文武ヲ修メ旁ヲ日本再造ノ事ニ奔走ス慶應四年（一千八百六十八年）徴セラレテ西京ニ到リ軍務ニ從事ス尋テ政府ノ官吏ト為リ累進シテ明治廿一年（一千八百八十八年）大藏次官ニ任セラル明治二十三年（一千八百九十年）始テ國會ヲ開設セラルヽニ当リ財政問

閑係哲学個要終

東京 榛原製

題ハ獨力擔当幹旋甚ダ努ム尋テ大藏大臣ニ任セラル此時ニ際シテ日清戰爭ノ役有リ軍資供給甚タ其宜シキヲ得ルノ勲功ニ因リ勲一等ニ叙シ特ニ貴族ニ列シテ子爵ヲ授ケラル爾後朝野ノ間ニ出入スル茲ニ年有リ本年本講述ノ成ルニ及ムデ特ニ余ニ命ジテ之ヲ評定セシメラル而シテ余ハ目下專ラ世途ニ鞅掌シツヽ有ルガ故ニ之ヲ敢テセズ只君ノ履歴ノ大要ヲ附記シテ以テ之カ總評ニ換ルト云爾

男　渡邊千冬　識

東京榛原製

国立国会図書館　渡辺国武関係文書（その2）2137